

① テーマ立案

助成金申請とはどういうことか？

◆ 助成金に応募すること／申請書類作成の意義

- ・ **当落は問題ではない**
- ・ 応募すること自体が、研究上の経験（キャリア）を積むことになる
- ・ 落ちて失うものは何もない
- ・ 自分の研究の現在の進捗や課題を確認できる
- ・ 研究における問題意識、理論、実践（研究方法）を体系的に捉えることができる
- ・ 計画書を書くことで、研究を洗練し充実させることができる（研究費獲得はその副産物）
- ・ 他人にわかる言葉で自分の研究の独自性を伝えるトレーニングになる

◆ 助成金獲得にはノウハウがある

（１） 助成金申請のノウハウを知る意義

- ・ 助成金獲得ノウハウとは、以下を理解すること
 - ① 助成金の仕組み
 - ② 他人に自分の研究計画を見せることの意義
 - ③ 評価されるためには工夫が必要だということ
- ・ 絶対にこれで OK というノウハウは存在しない（できるところをうまく取り入れる）
- ・ ノウハウはマニュアル的に扱おうと硬直化し、失敗する
- ・ ノウハウを知る意義は「研究生活の充実のため」という原理原則を意識することで、応用可能性が出てくる

（２） 助成金獲得とは研究が評価されるということ

- ・ 助成金獲得とは、自分の研究が評価されたことの一つのあかし
- ・ 評価を気にして評価に合わせるのではなく、評価を引き寄せ、味方にして、自分のやりたいことをやっていく
- ・ 資金のために研究する、資金のために研究を変えるなどというのは本末転倒

（３） 申請書類とはコミュニケーションである

- ・ 助成金申請書類とは、一種のコミュニケーション
- ・ 申請書によるコミュニケーションの相手は複数（多重コミュニケーション）

- ①未来の自分（自分が数年後どういう研究をしたいのか）
 - ②審査員
 - ③（審査員の背後に存在する）社会（申請書を通じて、その分野での現在の研究水準や研究領域の広がりを呈示することになる）
- ・申請のノウハウを知るということは、コミュニケーションのルールを知ること
 - ・審査者は、その研究のことをわかろうと思って読んでおり、わかると安心する
 - ・その研究の世界で何が起きているかを丁寧に述べる
 - ・審査員が楽しく読めるように
 - ・専門外の人に伝える意識で
 - ・審査員のうち、自分と同じ分野に属する人はせいぜい1人か2人程度だと思えばよい

（４）誰とコミュニケーションするか＝どの助成金に応募するか （相手を知る）

- ・公的助成金や民間研究助成の公募一覧で調べる
- ・評価はインタラクション（相互作用）なので、やるだけのことをやったとしても評価されないということは起こりうる
- ・自分がどこかの評価に合うのかを見つけていくことも大切
- ・ある分野では珍しい手法だが、別な分野ではありふれているということもある→その助成金の対象分野をよく知り、自分の研究に有利なものに応募を
- ・領域が違ふと思われないように気を付けることも必要
- ・価値観と発想、新たな展開を共有できる分野の助成金に応募する
- ・応募する学問分野に貢献できる研究であることを熱くアピールする
- ・申請先が決まったら、その財団や機関が公開している情報をくわしくチェックする
- ・要項を読む際は、申請書類に必要な項目だけでなく、書類選考のプロセスなども細かく分析する
- ・要項だけではなくHP等を通して相手の運営機関の仕組みや理念を頭に入れておく
- ・**どのような研究が求められているのかを知ることが重要**

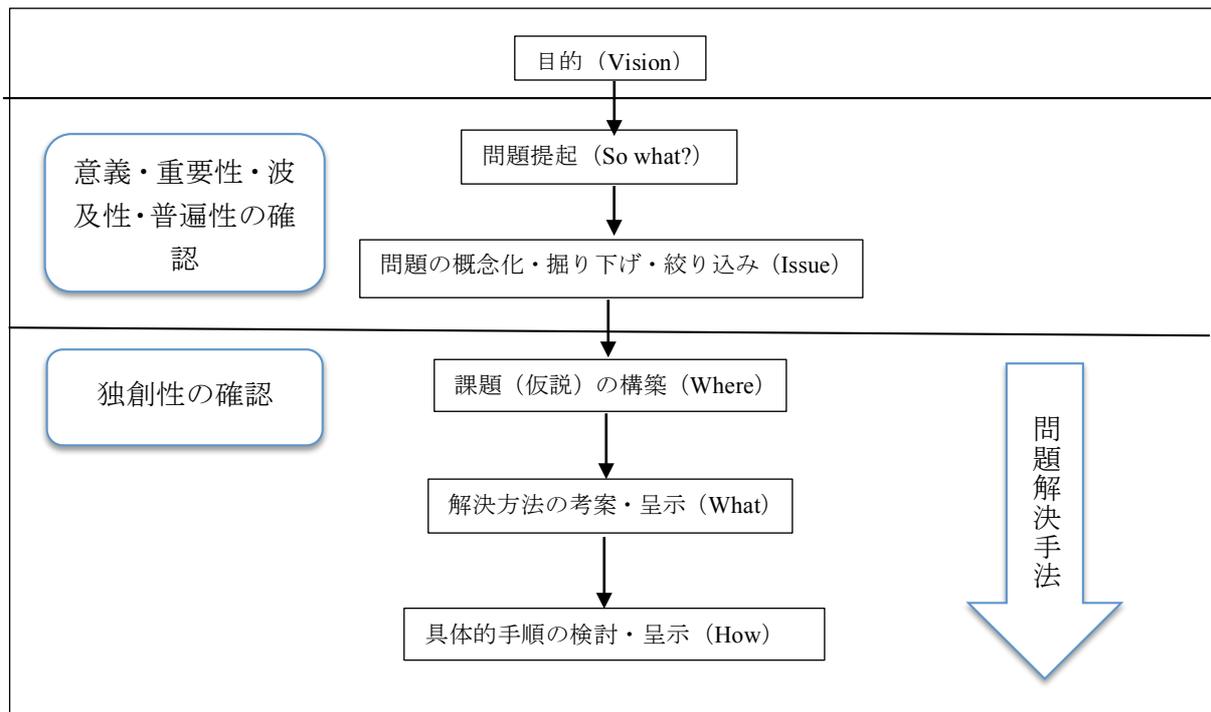
研究テーマを立てる

- ・ **期間内に結果が出せるもの**であること
- ・ 通りやすいテーマというものは確かに存在する（審査員の好み、流行）
- ・ 広い概念を持つ「ビッグワード」を使ったテーマ設定はしない
- ・ 個人的な関心より **公共性・波及性・普遍性のあるテーマ**

（１）テーマの賢い選び方

- ・ 研究にも流行がある→競争の激しいテーマ設定や切り口を避ける
- ・ 一心不乱に大量の研究をすることでは、答えを出す価値の高い研究にはならない
- ・ 研究においても**生産性の高さ（解の質を磨きこむ研究姿勢）の追求を**
 - ①複数の集団の間で決着のついていない問題を研究する
 - ②根本にかかわる、もしくは白黒がはっきりしていない問題を見極めて研究する
- ・ 上記①②のような問題を解が得られるレベルまで小さく砕き、整理して、ストーリーの流れを組み立て、内容を分析し、アウトプットできる形に設計
- ・ 科研費データベースに自分の研究関連キーワードを入力して、これまでにどのような研究が採択されているかチェック

(2) 着想の流れ



- ・ How から入ると、どうしても恣意的な課題設定になりやすいので、Where を考えた上で、What や How を決定するとよい

◆ 研究の規模と具体性

- ・ 研究の規模は、小さすぎても大きすぎてもいけない
- ・ 数年かけなければいけないような規模であることをアピールしつつ、実現可能性の高さも訴える
- ・ 適切な規模と具体性を示し、**助成金の使い道がはっきりわかるように**する（たとえば環境や素質自体は整っていて、研究の消耗品を購入すればスタートできる、などをアピール）